

生きたい私は貴女を呼ぶ

アステカのキャスター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——鮮やかなり天元の花 その剣、無空の高みに届く。

なればこそ、その剣にて汝を示すのが道理。自らの剣技は果たして高みに届くのか。

——汝、最強をもって最強を証明せよ。

……なんて堅苦しいのはナシナシ！生き残ったらうどん食べにいくわよ!!

目次

プロローグ	1
貴女は誰？	12

プロローグ

カナ・フローゼ。12歳のちよつとした訳あり魔術師だ。

魔術師らしからぬ振る舞いと現代技術の併用。果ては交友関係まで多岐に渡るとも言える。生粋の魔術師としての生き方はしていない。

少なからずカナの中で人間的に振る舞う自分と他を冷めきつた目で眺める自分のギャップに嫌気がさしていて苦手なものは苦手とはつきり言うタイプだ。そして魔術回路は超一級品でフローゼ家代々に引き継がれた。

今やフローゼ家は引き継ぐことにほぼ決定されている。それ自体は問題ないが、フローゼ家はあまりの魔術回路の少なさと質の悪さに没落した弱小家系だ。

だがカナだけは違ってしまった。

フローゼ家の歴史では過去最大の魔術回路数に質の良さ、そして普通なら珍しい稀少な魔術属性である「属性：空」

だが、没落家系である事には変わりはない。貴族たちはいくつもの圧力を掛けてきた。流石にうんざりし始めていた両親は実績目当てでカナを聖杯大戦に送り込んだ。

カナも流石に殺し合いに参加するのは抵抗があった。まだまだ多感な12歳だ。だが現実には非情にも対戦の参加資格である令呪が宿ってしまったのだ。

自暴自棄になりかけたが、エルメロイ教室に通っていたのもあって、同年代のライネスに相談し、カナはライネスに触媒の入手のコネを頼み込んで、日本のサーヴァントの触媒を手に入れた。正当な取引で大分お金が飛んだが、聖杯を持ち帰った実績、或いは聖杯大戦を生き延びた実績さえあれば両親も満足だろうと思い、満足だった。

カナは赤の陣営に選ばれた

赤の陣営と呼ばれているマスターは黒の陣営のサーヴァントを排除してから、最後は赤の陣営のサーヴァント達で聖杯の所有者を決め

るのだ。明らかに血生臭い事例にため息を漏らしながらも私はそのマスターが集まる教会に赴いた。

それが失敗だったのだと、後に語ることになる。

バチバチ——！！

「痛たたたたたた!?!」

突如、中指に付けていた指輪から電流が流れたような痛みが走る。すると夢の中にいたような感覚が消えて目が覚めた。

「……は……?」

部屋の中を観察した。この部屋は4、5メートル四方ほどの大きさであり、部屋の中心には四角形の机が置かれていた。その机を囲んで座っているのは5人の男女であった。

彼らは虚ろな表情で、何かを呟いたり、身振りをしたり、中身の入っていないカップを口につけたりとしていた。

「毒に耐性が多少あったから操られている事に気付けたのね。ライネスに感謝しなきゃ……………」

見たところ暗示か何かにかかっているようだが、口元を押さえて周囲を見渡すと芳香のようなものが焚かれている。

彼らは私と“赤”のサーヴァントのマスター達だ。

恐らく暗示に掛けた後、アサシンに操られてそのままここに幽閉されていたのだろう。令呪がしっかり見える所から、サーヴァントは既に召喚されている。自分もサーヴァントのパスが繋がっているのを

感じる。

「あの神父、シロウ・コトミネがサーヴァント達のマスターになってるのかも……あの詐欺師、絶対殴る」

とりあえずライネスに感謝しないといけないな。暗示にかかった時に役立つ指輪をくれたのはライネスだった。

サンプ……実験の為にわざわざ用意してくれたらしい。いやあんまり変わんなくない？

まあ物理的に痛かったですですけどね!! 何で痛みが強いのか! 絶対あの小悪魔笑ってるでしょ!!

「令呪が繋がってない……魔力パスは通用してるのに、この場所自体が阻害してるのかな。多分」

サーヴァントを令呪で呼ぼうにも、令呪が働いてくれる気がしない。なんとなくわかる。毒とかそう言う理由ではなく単純に呼べる気がしない。理由は普通に考えてこの芳香から逃れたら令呪を使つてサーヴァントを呼ぶ事を恐れているのだろう。

「逆に言えば、この場所ではなければ令呪も働く。念話は無理だし、他の人を起こして抜け出すのは無理そうだし、とりあえずこの場所が工房みたいだし、逃げてサーヴァント呼び出したら考えよう」

ゆっくり音を立てずに扉を開ける。廊下と言うには広いし、まるで城のようだが、兵どころか人の気配すらしない。まあ魔術工房に人を配置する馬鹿はいないだろう。恐らくあのアサシンがキャスター並みの力を持つていて、見つければ工房内の私は手玉に取られる。

だが、城であるなら逃げる範囲は広いとも言える。幸いにも触媒以外のものなら宝石が5つと携帯電話、お財布など必要なものは取られていない。指輪もそうだが、サーヴァントだから普通の魔術師では歯が立たないと思い、敢えて何もしなかったのだろう。まあ物理的な痛

みで暗示を解くなんて力技は魔術師らしくないし……

「魔力パスが伸びてるのは……あっちか」

幸い、魔力パスを繋いでいるおかげである程度の方角は分かる。私のサーヴァントは日本の英霊の中でも最強の力を持つサーヴァントだ。本来なら今回の聖杯戦争で東洋のサーヴァントは召喚されないはずだが、恐らく呼び出したのはキャスターかキャスター並みの能力を持つアサシンが手伝っているのだろう。遠隔で更には本人ではないマスターがサーヴァントを召喚させるなんて並みの能力じゃない。まあ召喚できなかつたら他に呼び出せる候補はあったが、逸話的に能力が強いか分からないので出来れば日本のサーヴァントを呼び出せれるようにするつもりだった。

光が見える。暗い中で慎重に走っていたカナにとって外の手がかかりになる場所だ。柱に身を隠しつつ、光が差す場所に足を踏み込んだ。

「っ……………!」

そこはまるで劇場、ある意味コロッセオのような配置の空間、真ん中には王が座るような椅子がある。ここは多分、アサシンにとって重要な場所だ。アサシンが王に関する者と言う事が分かる。

ガコン!!

「なっ……………!?!」

その空間に入った瞬間、後ろの扉が閉じていた。

扉を力尽くで開けようしても扉が開くことは無い。強化の魔術でも無理だ。恐らく宝石も無意味だろう。

「つつ!! 閉じ込められた……!」

「ここは我の空間、閉じ込めるなど造作も無かろう」

カツカツとハイヒールの靴の足音と黒いドレスをした女王を連想させるサーヴァントが、反対側の扉からこちらに歩いてきた。

あの時、神父の側にいたサーヴァント。キャスター並みの能力を持つ神代の魔術師。

「まあ我の暗示の香を逃れたのわ我も少し予想外でな。よくぞここまで来たと褒めてやりたいところよな」

「……赤のアサシン」

「如何にも、我はこの城の女王。しかし監禁していたマスター達をサーヴァント達に気付かれずに御しねばならぬからな。我直々に向いてやったのだ。光栄に思うがいい」

閉じ込められた状況で戦うのは明らかに不利、と言うよりサーヴァントと戦うのは愚策だ。魔術師とは言え人間がサーヴァントに勝つなんて、現代では指で数えられるくらいしかないだろう。戦場での殺し合いをする戦士ではなく、直接戦闘を嫌う魔術師であってもそれは変わらない。

「我も少し暇でな。せめて退屈凌ぎくらいにはなってもらおうぞ小娘では、踊るがいい」

「つつ!! 『固有時制御・第五階梯』!!」

アサシンが指を鳴らすと鎖がカナを束縛しようと射出されるが、カナは空間から飛び出した荊を操作し、それを防ぐ。

「ほう……」

アサシンも少なからず自分が放った魔術が防がれた事に驚いてい

る。更には荊は自分の魔術に利用した魔力を吸収していくのだ。

カナの魔術は固有結界を利用した限定的な起源展開だ。

カナの起源は『吸収』と『封印』。

カナの家系は植物に関連したものを使うのだ。それは大地があるから人が存在すると言う意味を逆手に取り、大地こそが人間を超越する力を持つならそれを操った先に根源が存在すると言う逆説の理由から家系は代々、それを研究していた。

そして8代目のカナはその教えから固有結界に至る心象が確立され、8歳にして固有結界を展開できるようになっていた。俗に言う天才であり異端とも言えるのだが。

カナの固有結界、『呪われし薔薇の楽園』^{ラウダルク・スエルテ}は家計の思想から作られた荊の世界。荊が魔力や呪い、毒を吸収し薔薇を咲かせる。更には荊で縛った相手を封じると言う規格外の力を持っている。

だが、欠点として固有結界は展開時間が明らかに短いのだ。

それは世界を侵食した自分の心象で世界の在り方を塗り潰す為、世界は抑止力によって展開出来る時間が決められている。それを無理に伸ばそうとすればカウンターとして掃除屋を寄越してくる程だ。

そこでカナは考えたのは固有結界の侵食範囲の制限だ。

固有結界を展開する範囲を7段階まで設定し、完全開放をしなくても固有結界と同じ力を魔力消費を少なく扱えるようにしたのがカナの我流魔術『固有時制御』^{リミットアウト}だ。

展開出来る範囲は7段階で約半径50メートルの範囲までだ。大体1階梯ごとに7メートルの範囲だ。階梯ごとに魔力の消費も大きい。世界を塗り潰さなくても固有結界よりメリットは大きい。

第五階梯は約半径35メートル。その範囲なら荊を自在に操ることがができる。因みにカナ自身、その心象を持っているせいか毒や呪いが効きにくい。アサシンの毒でも、「あつ、これ夢だわ」と割り切っていたが暗示が結構強かったせいか体を動かさなかったので物理的な痛みで覚醒していた。

「ならば、こんなのはどうだ?」

アサシンが指を鳴らすと今度は天上から巨大な術式が現れる。そして亜空間から召喚されたかのように、魔獣が召喚された。と言うよりアレは神話とかで誰もが聞いた事あるような

「……まさか、竜?」

神話に出てくる竜とは言い難い。ファブニールやティアマトのような悪竜や神話に綴られた存在と言う訳では無い。竜種を持つ存在、ワイバーンと言ったところだろう。

だが、それが6体も出されたのだ。少なからず絶望視してしまうほどだ。吸血鬼や竜種の存在は神秘の薄れたこの世界で驚異的だと言うのに、それが6体。カナも流石に泣けてきた。

「ヤバっっ!?!」

こちらに飛んできたワイバーンを荊で縛り付けるが、力がある程度封じて魔力を吸収しているにもかかわらず、膂力で荊が引き千切られる。

しかもワイバーン一体に翻弄されて他は待機している。カナを殺さない為の配慮だが、ワイバーンが出てきた時点で遊びを超えてると愚痴りたいカナ。

「っっ!・ 仕方ない……!」———Anfang^{セツト}」

カナはポケットに入っていた宝石をアサシンに向けて投げる。アサシンは当然のように障壁を張るが、カナが投げたのは攻撃用では無い。

カツ!!!

「くっ……!」

目眩し用の閃光術式。

アサシンの視界を少しだけ潰す。対サーヴァント用に作ったものではない為、そこまで効力は無いが、その一瞬さえあれば十分だった。ワイバーンもアサシンの統率がなければ動く事が出来ない。

「E軽s i量st g重ros, E重s i重st k重lein………!!」

カナは眼鏡を外し、扉に向かって走り出した。

「くっ……小癩な真似を……!」

アサシンの目を潰せたのは、ほんの数秒だ。
だが、アサシンが目を開けるとその光景に驚愕する。

「何っ……! 扉が……!?!」

そこにはカナが居なく、扉はまるで空間ごと消失したかのような大きな穴が空いていた。

急いで扉を開けるとカナが出口まで走る後ろ姿が見えている。

「V戒OX G引ott, E重S A地tlaにs………! ——!」

カナが詠唱しているのを見たアサシンが鎖で捕縛しようとするがもう遅い。進行方向に荊の壁で遮られ、鎖は届かぬままカナは城の外へ飛び込んでいた。

「くっ……遊び過ぎたか……止む終えんな」

アサシンは城からカナに向けて大量の術式を展開し始めた。マスターが目覚めた以上、逃せば後々面倒になる為、アサシンは捕縛から殺害に思考を切り替えたのだ。幸いにも令呪を持つマスターが入れば、サーヴァントが消滅する前にマスターを変える事は容易い。

「さらばだ。現代の小娘よ」

アサシンの展開した魔力砲がカナへと襲いかかった。

「ぐっ……ああ………?!」

空中を飛んでいる間に魔眼の影響がここで発動される。

カナが最も狙われやすい理由は2つ。固有結界はカナ自身が隠しているのだが、もう一つは隠しきれなかった魔眼にある。

カナは生まれつき魔眼を宿している。ランクは宝石だが、強さ的には虹と言われてもおかしくないらしい。エルメロイ先生にもそれは滅多で無い限り隠せと言われて魔眼殺しの眼鏡をかけていたのだ。

カナの魔眼は『亜空の魔眼』

この世界に存在するものを時間の流れがこの世界の数千倍早い亜空間へと飛ばしてしまう魔眼だ。簡単に言えば、カナが見たものはこの世界から時間の流れが早い世界へと飛ばしてしまうものだ。

カナの魔眼は『実際に存在するかもしれない世界が実在してはいけない世界でもあるもの』と言う曖昧な世界』に接続するのだ。その世界には何も無く、エーテルすら無く、光すらないが時間の流れが異様に早いのだ。一秒に数百年単位の時間が流れている為、カナ自身はこの魔眼が怖いのだ。

暴走でもして人を取り込んだら、その亜空世界でただ朽ちていくしかないのだから怖くて魔眼を出来る限り封じていた。

「……で……魔眼の……影響が……！」

魔眼だけで魔法の域にあるそれは魔術師にとって根源の研究に喉から手が出る程欲しいものだろう。

だが、欠点として膨大な魔力を消費する。亜空間に接続する為、接続した時間は多大な脱力感に見舞われて、しばらくの間は激痛が走る。当然ながら連続使用も出来ない。消費する魔力は固有結界よりも多いのだ。恐らくカナ以外が使えば死の一步手前まで逝く事になるだろう。

「でも……抜け出せた！」

現在、空中にいるカナに縛るものはない。重力の術式が乱れるのを抑えながらも令呪のパスを感じる。そして確信する、今なら呼べる。

「——令呪をもって命ずる！」

しかし、次の瞬間、カナの周りに多大な魔方陣が浮かび上がる。

これはアサシンの使っていた術式だ。しかもこれは迎撃用だと直感的に理解する。今のカナに防ぐ術はない。

けれど、カナは命令を止めなかった。

「——私のサーヴァントよ、我が元に参れ!!」

令呪が光り出し、それと同時にアサシンの魔力砲がカナへと射出される。ここまで来たのにあと一步、間に合わない。

「……………っ！」

轟音が鳴り響いた。

いくらカナでもこの数から放たれる魔力砲は防ぐ術はない。

しかし……それなのに痛みがない。

「……………」

突如、魔力砲が切り裂かれる。

あれだけあった術式を剣で切り裂いている。それはまるで奇跡を見ているかのような光景だった。

「二刀三拝。無限を破り零に至る……なんてね」

「……凄い」

そういつて一輪の花のような笑顔を咲かせた彼女……そう、カナが呼び出したかったサーヴァントは日本の中でも数人しかいない程の剣の実力者だ。

日本史上最強の剣豪として名高い、江戸時代初期の剣術家。

武蔵が創始したとされる流派 “二天一流” を身につけ、大刀と小刀を用いる “二刀流” の達人。

新免武蔵守藤原玄信——俗に多くの物語でこう呼ばれる。

宮本武蔵——と

「ってわあああああ!? 落ちてるううううううう!?!」

あつ、なんか思ったのと違うらしい。

貴女は誰？

前回を振り返ろう。

カナが呼び出したかったサーヴァントは日本の中でも数人しかない程の剣の実力者だ。

日本史上最強の剣豪として名高い、江戸時代初期の剣術家。

武蔵が創始したとされる流派“二天一流”を身につけ、大刀と小刀を用いる“二刀流”の達人。

新免武蔵守藤原玄信——俗に多くの物語でこう呼ばれる。

宮本武蔵——と

「ってわあああああああ!? 落ちてるうううううううう!?」

「なんか想像してたのと違うっ!?」

空中で令呪の転移をしたせいでお互いに空中から地上までスカイダイビング真っしぐらだと言うのに随分と余裕のある2人。

いや魔力切れに近い私にとっては余裕は無いが……

「貴女が多分私のサーヴァントだよね！ 着地任せられる!？」

「ええっ、人を抱えてこの高さの着地を任せるなんてサーヴァントでもない限り……あつ、私今サーヴァントだった!」

「大丈夫なのこの英霊!？」

あつ、これ結構残念なタイプの英霊だと直感的に理解する。と言うか理解してしまった。地面まであと数百メートル、いくら重力調整や軽量化の魔術をかけていてもこのスピードで落ちれば挽肉確定だ。

「まっかせてマスター!!」

「お願い!」

地面にめり込むかと思ったが、私を抱えながら華麗な着地が出来たようだ。

「じ、地面だ。生きてるって素晴らしい……!」

「うわっ、あんな高かったのね」

地面に足が着くと感動を覚える。

よくあの高さから生きてるよね私。と言うか今言う事では無いが私のサーヴァントは刀こそ優れているが、女じゃないですか？

宮本武蔵って女の子だったの？

「……とりあえず、私を抱えて東に向かって」

「東?」

「ここじゃまだ領域内テリトリーの可能性もあるし、何よりやるべき事があるから……自己紹介はその後でするから」

「わかった。じゃあ行きますか!」

私はサーヴァントにお姫様抱っこされ、東のルーマニアに向かった。

「ってちよつと待て」

「いや待って、別にお姫様抱っこじゃなくても良くない!?!」

「うーん。却下!」

「何故!?!」

恥ずかしいので流石に抗議するも却下された。

宮本武蔵は一目見て「アリ! ストライク!」と心の中で叫んでいた。まあカナの外見は肌は白く銀髪、整った顔立ちはご令嬢か王姫を連想出来るほど、魔眼のオンオフを入れられない限りは紅い瞳をしている。『亜空の魔眼』の時は紫色に変色するらしい。

まあまだ小柄な12歳、性格も悪くないので宮本武蔵にはストライクゾーンだった。

「幸先不安だなあ……」

「不吉な事言わない!」

主に貴女のせいですハイ。

「まさか地上まで逃げられるとは仕方ない。使い魔を——」

「いいえ、放っておいて構わないですよ。アサシン」

「何だと?」

アサシンの後ろから声をかける正教者、シロウ・コトミネが水晶越しでの2人を見る。

「バーサーカーについては扱いが難しい事を配慮していましたが、マスターと共に逃げてもちちらの戦力には劣ります。精々黒のサーヴァントを潰す為に動いてもらいましょう」

「だが、奴等が黒の陣営に寝返った時は」

「その時はその時ですが、問題はありません」

バーサーカーについては最初から作戦に組み込んでいないのだから。バーサーカーは狂化のランクによって意思疎通が取れない。バーサーカーとして現界した宮本武蔵は狂化Cで戦いになるとマスターの指示や細やかな作戦が取れないのだ。

故にシロウ・コトミネはバーサーカーを計画から除外し、使う時は城に攻め込む単純な作業を考えていた。

「宮本武蔵……確かに強力な存在ではありますが、この場所に押し留めていても使い所が難しいので、先程来たセイバーのマスターと同じ役割をしてもらいましょう」

既にシナリオは決まっている。

ならばバーサーカーは戦力潰しに丁度いいのだ。シロウ・コトミネは赤い外装をはためかせながら、他のサーヴァントの指示の為に姿を消した。

「どうにか、撒けた筈……………」

あの浮遊する城から逃れたのは僥倖だろう。ライネスに後でお礼の品を用意する事は決定したとして、泣け無しの魔力でアサシンの感知に結界を張って居場所を隠す。幸い、霊脈に近い場所だったのは奇跡だろう。

「さて…………バーサーカー。貴女の事を聞く前に教えて。私が居なかった場所では一体どうなっていたの？」

「うーん。サーヴァントのマスター全てがアサシンのマスターに任せられているから指示に従って欲しいって言うってたわね」

「つまり、サーヴァントはマスターが監禁されている事を知らない訳だね…………」

ため息つきながら携帯を取り出す。

「先生…………」

ロード・エルメロイII世に電話をかける。

こういうところ、自分が現代魔術科に所属していて良かったと思う。

きっと他の教師だったら電話なんて持っていないから、魔術師のプライドが邪魔して頼れる人が居なかったのだろう。

『貴様…………いきなり休学届けを叩きつけておいて何の用だ』

いきなりの休学に対しての怒りもある。

にもかかわらず電話をかけて来たことに対しての困惑もある。

ただ同時に、生徒が無事であることに対しての安堵も見られるのだ

から、彼はいい先生だ。

どんな生徒であつても、悪態をついたとしても、基本的には見捨てない善人だ。カナは苦笑混じりに返答する。

「ライネスから聞いていませんでしたか？」

『聞いたさ。それでも休学届けを勝手に出して勝手に行けば怒りも湧く。それで、何のようだ？』

「赤の陣営に参加する全員の名簿を送つてくれませんか？ 多分ですけど時計塔に送られてますよね？」

『何故だ？ 君は赤の陣営に居るのだろう。大して意味などないだろう』

「赤の陣営から逃げたからですよ。私はライネスの贈り物のおかげでなんとか脱出しましたが、私を除いた他の4人は操られて監禁されます」

『何だと……?!』

流石にその想定はしていなかったのだろう。

しかし、サーヴァントが召喚された以上どうにもならない。下手に魔術師を派遣した所で返り討ちに遭うだけだ。

だが、カナは一つ思い浮かんでいた。アサシンのマスターが言峰神父で他の4人と自分を合わせて6人、あと1人いない。つまり、まだ神父に操られる前か、危険を察して単独行動しているマスターがいる筈だ。その人と行動できれば生き残れる僅かな勝算が立つ。

『……赤の陣営には獅子劫界離、フリーランスの死霊魔術師が参加している筈だ』

「獅子劫さんが？ ……確かあの人はあの場に居なかったから、多分当たりでしょう。その人を探して行動します」

『よろしい。彼には此方から連絡しておこう。ところで君が召喚したサーヴァントは何のクラスだ？』

「バーサーカーで真名は宮本武蔵です」

『何!?! ならば問題ないと思うが、私から出来る事はそれが精一杯だ。』

死ぬなよレディ』

「分かっていますよ。先生」

電話を切り、獅子劫さんの連絡が来るまで待機するのが決まった。とりあえずは野宿する事になるが、固有結界の荊を地面に突き刺して霊脈から魔力を供給出来るから明日になれば完全回復しているだろう。

「さて、バーサーカー。一応確認だけど、貴女は宮本武蔵で間違いないんだよね？」

「うんうん。新免武蔵守藤原玄信——人呼んで宮本武蔵。間違いないわ」

「逸話なら宮本武蔵は男な筈なんだけど……」

「あつ、それマスターちゃんにも言われた。あつ、貴女とは違うマスターにね。私はこの世界の宮本武蔵ではなく、並行世界の宮本武蔵として召喚されたの」

「並行世界……第二魔法の応用なら召喚には有り得るかもしれないけど、どうして並行世界から？」

「うーん、確かダヴィンチちゃんが推測してたけど、剪定事象によって断ち消えた次元にいた女性として生まれた可能性の宮本武蔵。らしくてさ。まあよくわかんないけどマスターは分かる？」

「嘘……でしよ？」

それは並行世界のもう一つの可能性。

例えるならアーサー王物語で登場するアーサー王が女として存在する事は特殊な例とは言え存在する。何故なら物語の結末を辿っているからだ。アーサー王が男でも女でも歴史さえ狂わなければ問題ないが、歴史から外れ修正力によって世界ごと修正される現象。それが「剪定事象」だ。

何かしらの巨大な事件などを契機に、全く別の歴史を歩んだ世界は世界に切り離され消去される。

数多くの並行世界がある中で、次々と増えていく並行世界全てを存在させるエネルギーは何処にも存在しない。地球レベルの文明では、それが1000年を超えると太陽系は破裂してしまうとされている。

そこで同世界観では1000年単位で一度編纂し、「少なくともあと1000年は続けられる」と判断した善い流れの世界だけを選び「編纂事象」として存続させ、悪い流れの世界を「剪定事象」として未来を閉ざし切り捨てるシステムがこの世界の抑止力に関わる事なのだ。

カナの家系の『亜空の魔眼』もそれに繋がっているとされるから知っているが、それを知るのは根源接続者や、抑止力そのものだろう。だが、この宮本武蔵についてはそれとは全く異なる存在。物語の結末に反して世界の抑止による修正力によって世界ごと消え去った存在が、消滅される世界から弾き出された架空の存在。

「別世界の……宮本武蔵」

歴史に正しく記載されなかった架空の英霊は恐らく、この世界の宮本武蔵と同等、それ以上の力を宿しているかもしれない。そう考えてるうちに疲労で腰が抜けかけ、倒れそうになる所をバーサーカーが支える

「私はカナ。カナ・フローゼ、貴女のマスターです」

「うん。可愛いしアリ！」

「抱きつくのは後にしなさい！」

バーサーカーの要素は『美人に抱きつきたい』事一点に関して話を聞かないかな？ と下らない事を考えているが、どうにも動けない事に気付いた。魔眼の影響と魔力消費、アサシンの戦闘による緊張感がまだ引き摺られている。今にも意識が飛びそうだが、力を振り絞ってバーサーカーに告げる。

「バーサーカー、私の願いはただ一つ。

——生きて、生き抜く為に力を貸してほしい」

これはエゴだ。自分が生き残りたいが為に彼女を利用する最低な行為かも知れない。サーヴァントとマスターなら当然かも知れないが、カナは違う。人道的で、まだ12歳の子供なのだ。

それでも、戦わなくてはいけない。

コレは聖杯戦争なのだから。

「任せなさい！ この宮本武蔵が貴女の力となり剣となる事を誓うわ！」

だが、そんな事情を真正面から受け止めるような返事が返ってきた。

ならもう何も心配要らない。この戦い、絶対に生き残ると心に誓った。

「そう……よかつ……た……」

「あつ、マスター！」

その言葉に安堵しながらも、カナは疲労で意識を手放していた。